利尻町の埋蔵文化財

利尻町埋蔵文化財包蔵地緊急分布調査報告書

昭和５２年２月

骨製針入れに彫刻された捕鯨の図
根室弁天島貝塚出土（オホーツク文化）

利尻町教育委員会

はじめに

近年，文化遺産を見直す気運が高まり，各地に於て文化財の保護，保存が行政，民間を問わず強く叫ばれているにもかかわらず，大気汚染や国土の開発とともに貴重な文化遺産が破壊，消滅してゆくことは誠に憂慮されるところです。

本町にも埋蔵文化財包蔵地が海岸線に沿って点在していることは，古くから本町を訪れた多くの学者や研究家によって明らかにされています。　しかし，住民の生活向上，産業の近代化を図るため計画的に道路，港湾の改良，整備が進められて既に一部の包蔵地が破壊，消滅の危機にひんしていると言えましょう。

このような現状にありながら当町には，これら埋蔵文化財に関する資料が皆無に等しく，調査の実施，及び台帳の整備が急がれておりました。この度，幸いにも文化庁，北海道教育委員会の指導を得て全町に於る埋蔵文化財包蔵地分布調査を実施し，その全容が明らかになったことは誠に喜ばしく今後の文化財行政に貴重な資料が残されたものと確信します。

この報告書を作成するに当り，現地調査及び資料整理を担当下さいました岡田淳子先生とスタッフの方々，関係機関の方々に厚く御礼申し上げますと共に，利尻町民の文化財保護思想高揚に役立てば幸いと思います。

昭和52年2月

利尻町教育委員会

教育長　小　島　光　男

序

埋蔵文化財が如何に私達の生活や地域，民族にとって貴重なものであるか改めて述べる必要はないであろう。　今日の社会のあらゆる営みは永い歴史の上に構築されたものであり，また将来の豊かな社会を展望する時，私達は必ず過去を振り返り，その基本的作業として先人の残した文化遺産から出来る限る多くのものを学んできた。従ってその為の第1段階として，国，都道府県，市町村を問わず，先人の足跡の所在を明らかにし，破壊，消滅の危機から守ってゆくことが必要であり，今や，国家的規模で行なわれている。

近年，国土の利用が急速に高まり，全国各地に於て分布の確認されていない埋蔵文化財が工事等の為に破壊，消滅したり，その危機に瀕しているが，当町に於ても産業の振興，生活向上をめざし，道路や港湾の整備，海産物の干場造成等が年々大規模に実施されている。従って，本調査は利尻島，利尻町に住んだ先人の足跡を明らかにする手がかりを得たこと，また，将来予測されるあらゆる破壊行為から未然に守り，保護，保存してゆくための資料が整理されたという意味で大きな成果をあげた。

言うまでもなくこの種の調査は専門家の手にゆだねる他ない。海岸線に沿って汎そ７５㎢の全町，そのうち対象範囲として考慮される部分が３分１だとしても，過去に町民によって捨われた遺物や当町を訪れた学者，研究家達によって書かれた報告書，町民から集めた情報等を手がかりとしただけでは，この分布調査の目的は達成出来ない，全く情報のない未確認の包蔵地を発見したり，住民が畑地として利用しているところには遺物も露出して包蔵地であることは判明しても，その範囲や時代背景については知るすべもない。

当教育委員会では，本調査に当り北海道教育委員会文化課の指導を得て次の方々に来町を依頼したものである。調査担当責任者　岡田淳子氏，調査員　宮塚義人氏，椙田光明氏，西谷栄治氏，塩野崎直子氏，荒牧美枝子氏，であり，この６名の調査団は限られた短い日程を昼夜兼行で精力的に町内の隅々にわたり踏査され，利尻町の埋蔵文化財包蔵地分布を明らかにして載いたもので改めて感謝申し上げる次第である。

利尻町先史文化の概要

今回の調査目的は，町内全域を対象として埋蔵文化財包蔵地がどこにあるのか，またその範囲はどの程度か，採集された遺物から年代を推定し，利尻町に在る埋蔵文化財包蔵地の分布状況をは握，その結果から基本台帳をつくるもので，発掘とは基本的に異る。従ってここに利尻町の先史文化，遺跡を全て明らかにすることはできないが，これからのため

に調査によって明らかになったことがらを町民の文化財保護思想向上に役立てばと願い利尻島及び利尻町の先史文化の概要をたどってみる。

現在の利尻島ができたのはC^{14}（放射性炭素はその放射性が半分になるまで５６００年かかる－半減期）によって絶対年代を測定できるようになり，２０８００年±１０００年前が定説となっている。利尻島は海底火山が爆発してできたのではなく，あらかじめ陸地があり火山の噴出物が堆積してできたもので２０８００年±１０００年前頃小規模な火山活動がはじまり，この時の流出物が扇状形に沓形と鬼脇から沼浦にかけて堆積している。利尻町はこの島の西側に位置し，全島面積の約５分の２の７５㎢を占め殆んどが利尻山のはき出した溶岩，火山灰の堆積した層の上に形成されている。

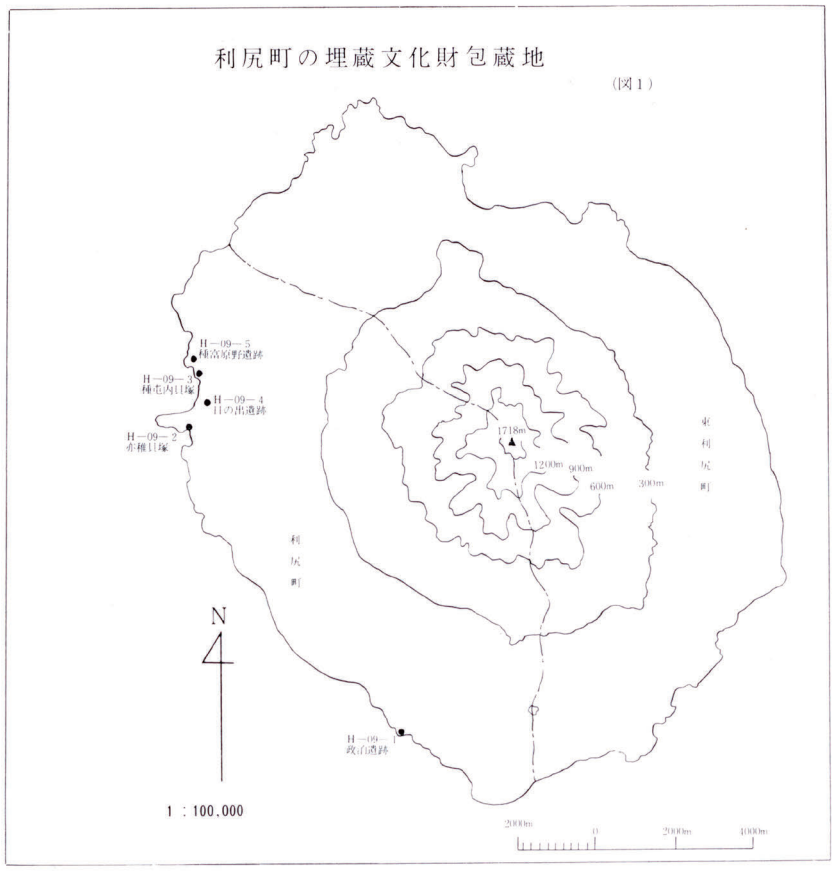
利尻島に存在する先住民族の遺跡並びに遺物については古くから知られており，遺跡名を記載した文献では１８８９年（明治２２年）石川貞治氏によって人類学雑誌「北海道に於てアイヌ人種研究の急務と石器時代住民の分布」に「ヲシドマリ」の遺跡があげられている。また１８９９年（明治３２年）に佐藤伝蔵氏が人類学雑誌「北海道利尻発見の石器及び其の碎屑の石質」に利尻島出土の石器について記している。この２冊の文献が利尻島の遺跡及び遺物についての最初の文献である。その後も多くの学者，研究家によって序々にベールがはがされ，利尻島，利尻町の先史文化が明らかにされてきた。

今回の調査で確認した埋蔵文化財包蔵地は，図１の５カ所であるが，これらの遺跡が利尻島の誕生と，また日本，北海道の歴史と如何なる関わりを持ち，如何なる位置にあったのであろうか，その流れを探ってみる。

北海道に人間の足跡がしるされたのは，洪積世最後の氷河期（ヴィルム氷河期）で，およそ２～３万年前とされている。東南アジアに於る人類の足跡は洪積世中期にさかのぼり約４０～５０万年前のシナントロプス（北京郊外周口店）だと言われるから，北海道に於る人類出現の歴史は新しい。そのころの気温は現在より平均６～９度も低く，高い山々は全て万年雪と氷河におおわれ，海は海水が減り，海面は現在より１００ｍ以上も低かった。間宮海峡は最深部１０ｍ，最深部６０ｍの宗谷海峡でさえ陸地となり，シベリア大陸カラフト北海道は陸続きであって，植物の殆んどが高山植物でツンドラの荒野に広がっていた。陸続きにマンモスやトナカイなどの北方系の動物が南下し，これを追って狩猟民族も陸づたいに歩いて渡ってきた。戦前は宗谷海峡の漁網にたびたびマンモスの骨がひっかかったり，北海道各地から出土するブレード（代表的な旧石器のひとつ）はシベリアなど北方系から出土するものとよく似ていて，北海道の最初の人間はこの点からも北方系と深

いつながりがあると言われるが，人骨が発見されていないので完全に言い切ることはできない。まだはっきりしないが，今回の調査で東利尻町に旧石器が発見され，これが確認されると約１万～１万２千年前には人間がいたことになり，全道的にも貴重なものとなる。

利尻町で確認された５カ所の遺跡はいずれもそれより新らしく，日の出遺跡（Ｈ－０９－４）種富原野遺跡（Ｈ－０９－５）が縄文時代中期・後期のもので約４千～４千５百年



前のであることが採集した遺物からほぼ明らかとなった。

北海道で土器が使用されはじめたのは今から８千～９千年前とされているが，まだ明確にわかっていない。しかし土器はその後数千年にわたり，ある時は独自の文化を，またある時は他の文化の影響を受けて，人々の生活を写しながら進歩してきた。それ由，数千年を経た今日，遺跡から採集される土器は，その時代や文化の広がり，生活様式など多くのことをもの語り，歴史の究明に欠くべからざるものとなっている。

その後，縄文文化の流れを大きく変えたのが日本の南方から伝わった鉄器の使用と米づ

くりの文化である。農業の技術が伝わると狩猟中心の生活は大きく変化し，新しい生産の技術を伴つた文化は急速に北上し，日本列島を包み込んでしまった。

しかし，この頃の北海道は現在と同じ寒冷な気候となっていたため，厳しい自然が稲作を受け入れるはずもなく，それまで本州と類似した北海道の文化は別な道を歩むこととなった。つまり本州の文化は米づくりを中心とした「弥生文化」であり，北海道では縄文文化に続く「続縄文文化」といわれる文化である。　やがて4世紀から古墳時代にはいり，西日本では豪族が生れ，大和朝廷の中央集権化が見られるのであるが，北海道では弥生文化から金属だけを受け入れた続縄文文化が擦文文化へと変質する。夫々の文化の詳しい説明については省略するが，北海道に住みついた先史時代の人々は大別して，旧石器，中石器，縄文，続縄文，擦文，そしてオホーツク文化の6グループと考えられている。擦文文化が道内内陸部に定着しはじめた7～11世紀にかけ，沿海州，カラフトから利尻島をはじめ，北海道のオホーツク海沿岸地方に，沿岸漁業，海獣猟などに特別に適応した人間集団が南下してきた。このグループはカラフトブタと大量のイヌを飼育し，各種骨角器等にも特異な発達の認められる沿岸漁業民でオホーツク文化と呼ばれている。発掘された人骨の形質も，それまでの土着民とは異り，北方的な色彩が濃く，すぐれた漁具と海を自由に渡れる業をもった新移住集団である。

礼文島船泊，宗谷の大岬，網走のモヨロ，根室弁天島　等に多くの遺跡が見つかっている。利尻町に於る政泊遺跡（H－09－1）　亦稚貝塚（H－09－2）　種屯内貝塚（H－09－3）は，この文化をもつ人々の残した遺跡である。

しかし，11世紀から12世紀に突然影を薄め，姿を消してしまった。オホーツク沿岸を4～5百年にわたり，海に生きる独特の高い文化をもったオホーツク文化も，未だその渡来，消滅の年代とその消長は解明されないことが多く，土着の民族に吸収同化したとか，何かの原因でオホーツク沿岸から追放されたという諸説があって依然として謎につつまれたままになっている。

参　考　文　献

・毎日新聞社：開拓，北海道の歴史，1973

・北方文化研究施設：北方文化研究，第3号，1968

・山川出版：考古学ゼミナール，1976

・西谷栄治：Field，NO，8，1976

埋蔵文化財包蔵地の紹介

1，政　泊　遺　跡　（マサドマリ）（H－０９－１）

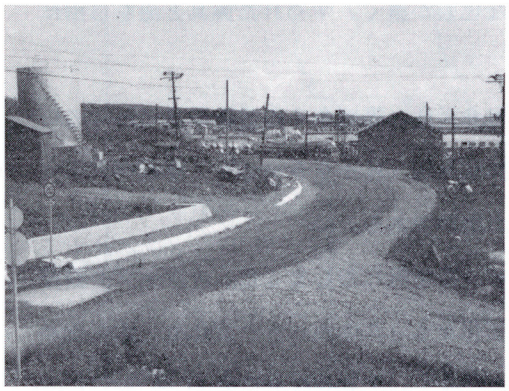
利尻町仙法志字政泊に在り（図A－１）昭和２４年新岡武彦氏により発見されたこの遺跡は，利尻町に分布する他の包蔵地から比較的隔絶した所に在って，現在では仙法志地区唯一のものと見られる。

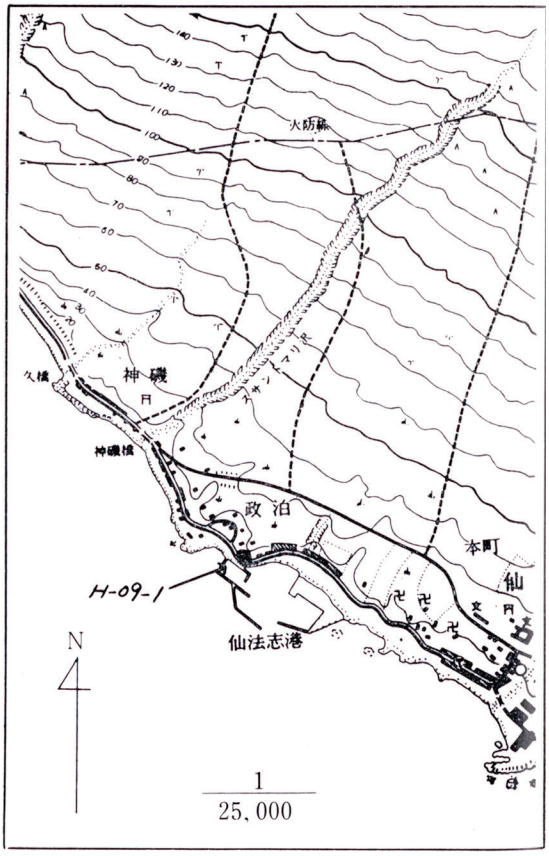
地形的には，神居から神磯の間は海岸まで段丘が迫り，生活の条件としては不都合であったと思われ，この段丘の切れたところに涸川が作っている扇状地があり，政泊はその末端部に位置している。現在，政泊港がこの位置に在り，天然の良港であったことが想像されるとともに湧水の豊富なところである。

現在は図A－２のように道路改良，漁業協同組合，重油タンク，冷蔵倉庫等が次々と建設され，遺跡は破壊状態にあるが，道路の両側に遺物を包含した貝層が残っている。

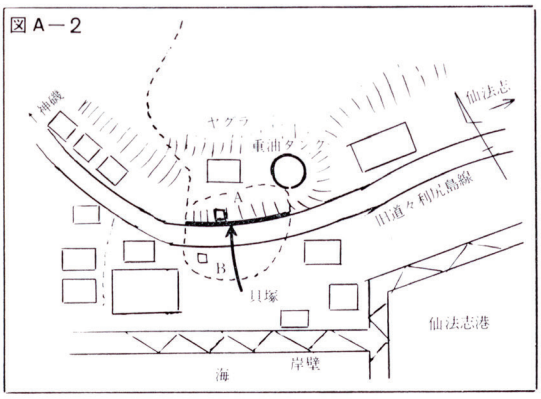
この地点から採集された遺物の石器（石鏃，砥石，石核，剥片），土器（小形土器，甕形土器破片多数）からオホーツク文化のものと思われる。

図A－1





図A－2



2，亦　稚　貝　塚　（マタワッカ）（H－０９－２）

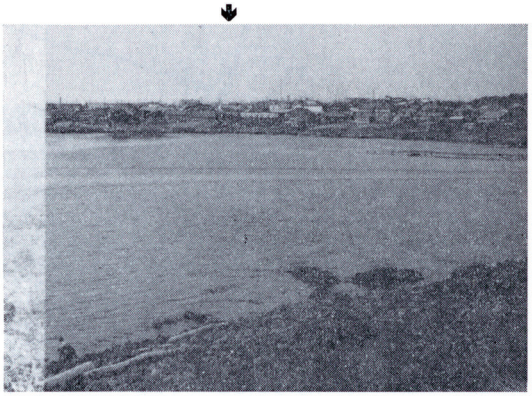
利尻町沓形本町及び緑町にまたがり，小さな湾に面した砂州の上に在る。利尻町では比較的大きなものである。（図B－１）。

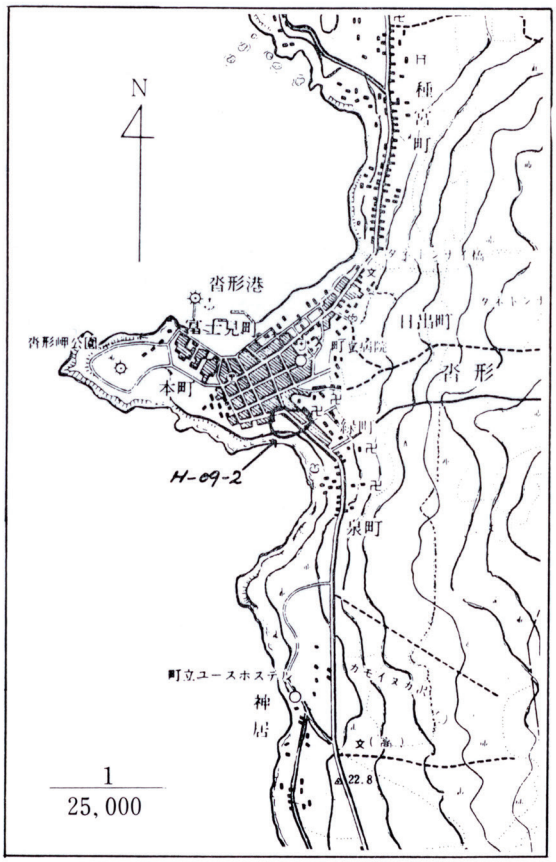
明治３４年（１９０１年）坪井正五郎博士によって発表された海獣の牙製偶像は利尻島のオホーツク文化を語る最初の遺物であり，それ以来あまりにもこの遺跡の名を高めた。

偶像は現在粉失し詳しいことは不明であるが記録によると『類品は本州及び北海道の内陸には発見されない，強いて類品を求めれば，エスキモーの所持品に類似する』とされていてオホーツク文化の謎を解く重要な役割を果している。

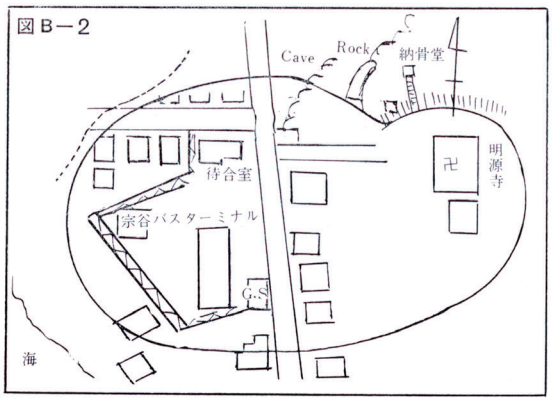
現在図B－２のように遺跡の中心部は，宗谷バス沓形ターミナルとなっており，ターミナル建設の際，人の頭骨も発見されたと言われるが詳細は不明である。「北方文化研究第３号」に『亦稚遺跡は既に壊滅した・・』とあるが，ターミナル建設の際，大部分の用地が土盛りされていることから，遺跡は土の下に埋められたまま保存されている可能性もある。　貝塚はアワビが主で，採集された遺物は石器（削器，石核，剥片）土器（甕形土器破片），多数でオホーツク文化の遺跡である。

図B－1





図B－2



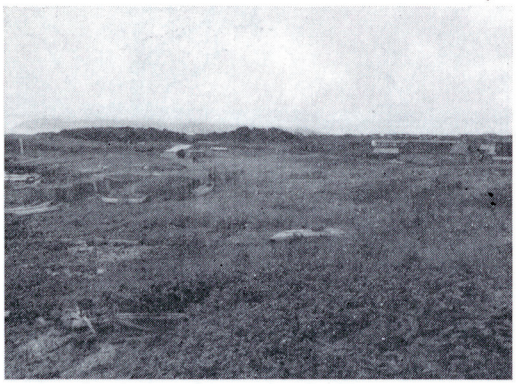
３，種　屯　内　貝　塚　（タネトンナイ）（Ｈ－０９－３）

遺跡は利尻町沓形種富町に在る（図Ｃ－１）。種富町は海岸線が入り組み，天然の良港であるとともに漁貝類の豊富な地域である。

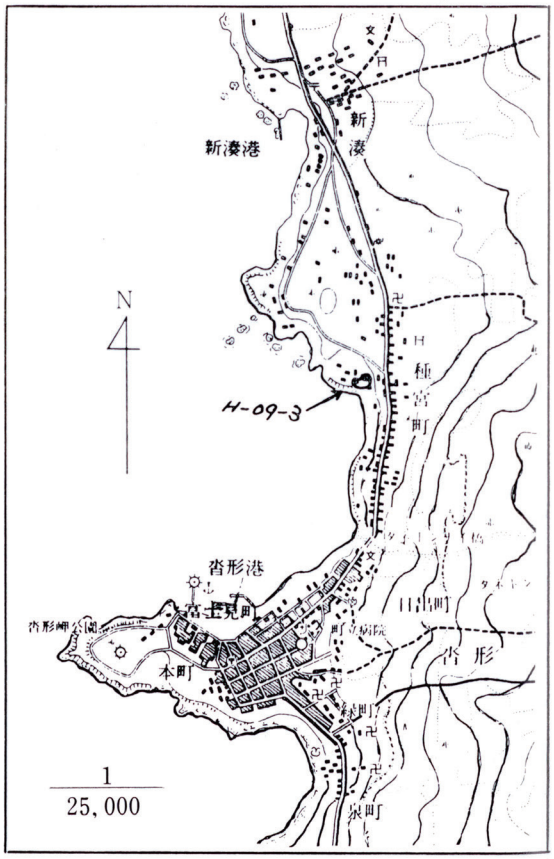
溶岩台地の上に砂州が形成され立地条件として恵まれていると思われる。昭和２５年（１９５０年）早稲田大学考古学研究会によって発掘調査された。この遺跡は小貝塚を含む遺物包含地で，海岸より約１０ｍ，標高４～５ｍのところに約１０００㎡にわたり在る包含層は，貝層はアワビ，魚骨を主とし三層に分れている。

現在は，図Ｃ－２のように付近に民家が迫っているため，庭や畑地として利用されている部分も多いが，大部分は草地となっているので比較的保存されており，本格的発掘によっては住居址も発見できると思われる。

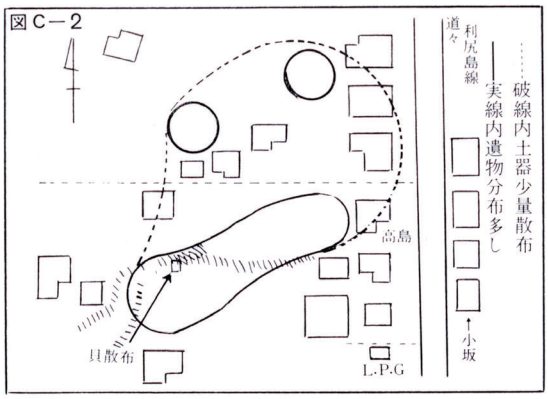
採集された遺物は，石器（石鏃，銛先，削器，掻器），土器（鉢，甕形土器破片）骨器（錐）等で，時代はオホーツク文化のものが主体を占めるが，縄文後期の遺物も散見される。



図Ｃ－１



図Ｃ－２



４，日　の　出　遺　跡　（ヒノデ）（Ｈ－０９－４）

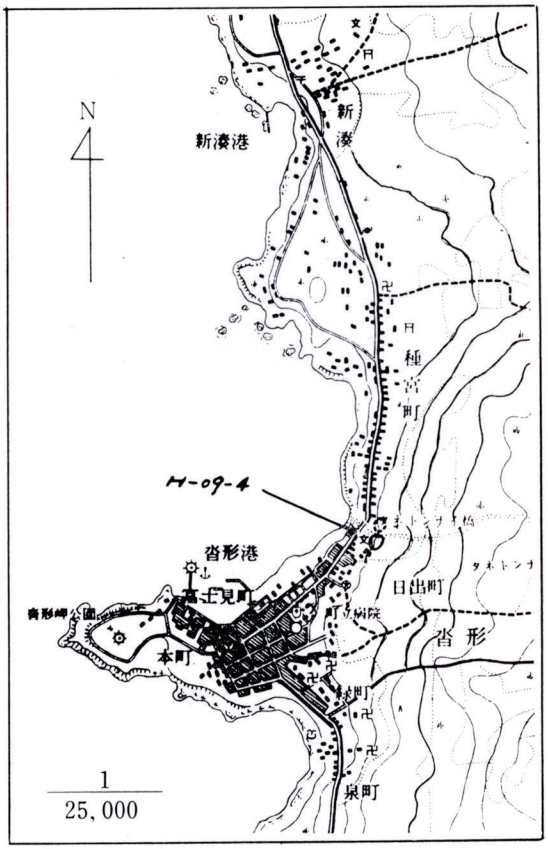
利尻町沓形字富野に在るこの遺跡は，他の４つの遺跡が比較的海岸に面し，標高３～４ｍの低い平地に位置しているのに比べ，約１５０ｍ位陸に入った標高１５～２０ｍ位の高台に位置している。地形はタネトンナイ沢が融雪時に作った扇状地であり沢をはさんで両岸にある（図Ｄ－１）昭和４５年に菅政敏氏によって調査確認が行なわれた。

現在図Ｄ－２のように遺跡所在地の南側は畑として使用され，貝の散乱状態から見てこの部分の遺跡は破壊されている。また中学校舎建築の際にも１部破壊されている。

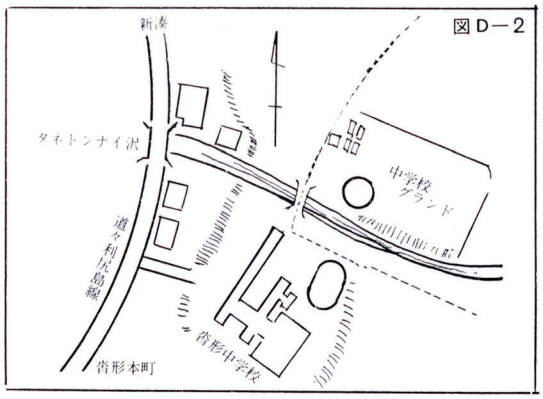
東方は戦後植林の為，土の運入が行なわれ，西方は中学校グランド造成の為，かなりの量の土盛りが行なわれ，この遺跡の範囲及び保存状態について明確でない。

採集された遺物は，石器（つまみ付ナイフ）土器（細かい縄文のある破片），貝（アワビ，シジミ，小巻貝）などで，時代は縄文後期と思われる。

図Ｄ－１



図Ｄ－２



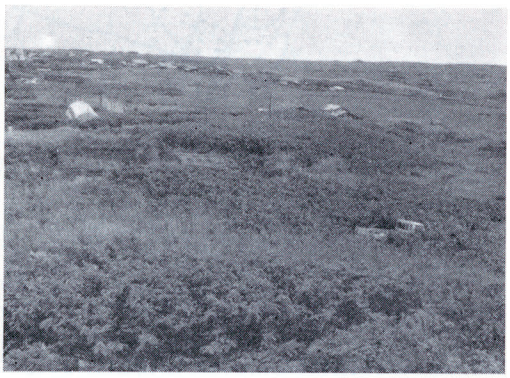
5，種富原野遺跡　（タネトミゲンヤ）（H－09－5）

利尻町沓形字種富町に在り昭和45年（1970年）菅正敏氏によって発見された（図E－1）。種屯内貝塚（H－09－3）に隣接し，海に向って押し出された熔岩が作った低台地上に位置している。利尻町では海岸に面してこれ程広範囲に平担な個所はない。

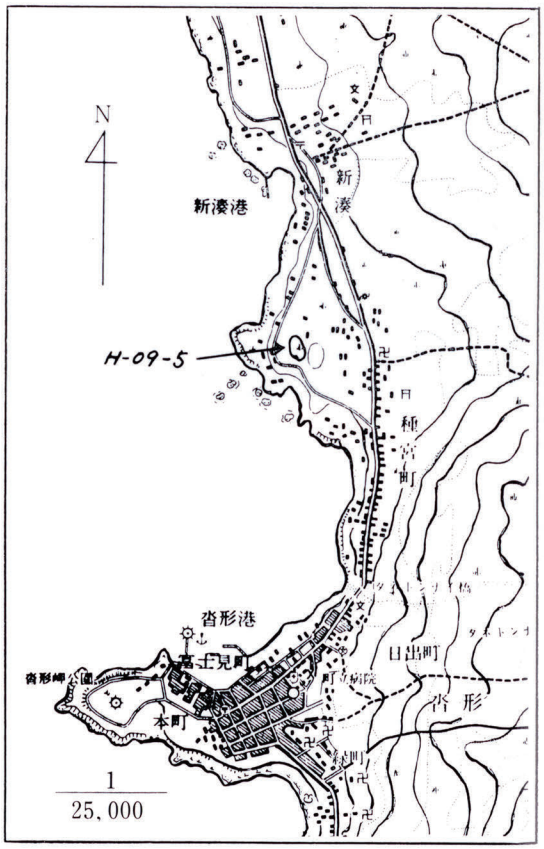
標高約5～8m位で5000㎡の範囲にあり，熔岩が小山のように盛り上っていくつか残っているが，その間の火山灰層に包含層があり，あまり厚くはない。近くに小さな沼がある。

現在図E－2のように，1部が畑として利用されている他は殆んどが谷地気の原野であり，利尻町内では比較的荒されていない埋蔵文化財包蔵地と思われる。

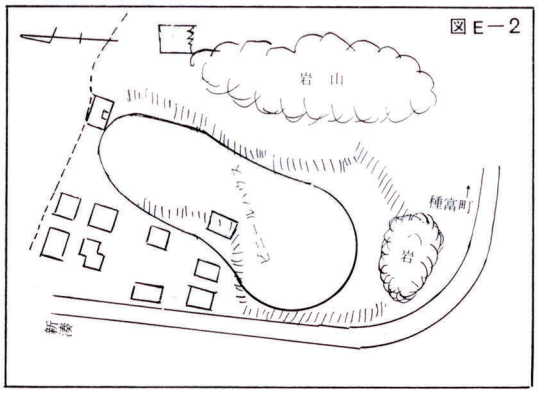
採集された遺物は石器（石鏃，石銛，ナイフ，つまみ付ナイフ，削器，掻器，石錐，石核）土器（破片多数）等で，時代は縄文中期から後期にかけてのものと見られる。



図E－1

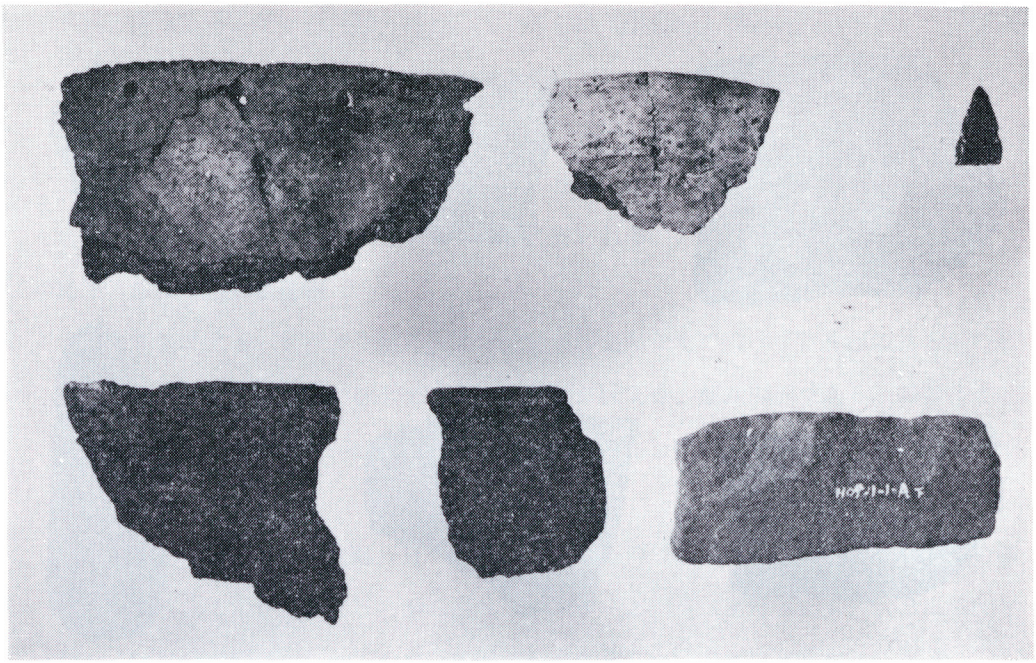


図E－2



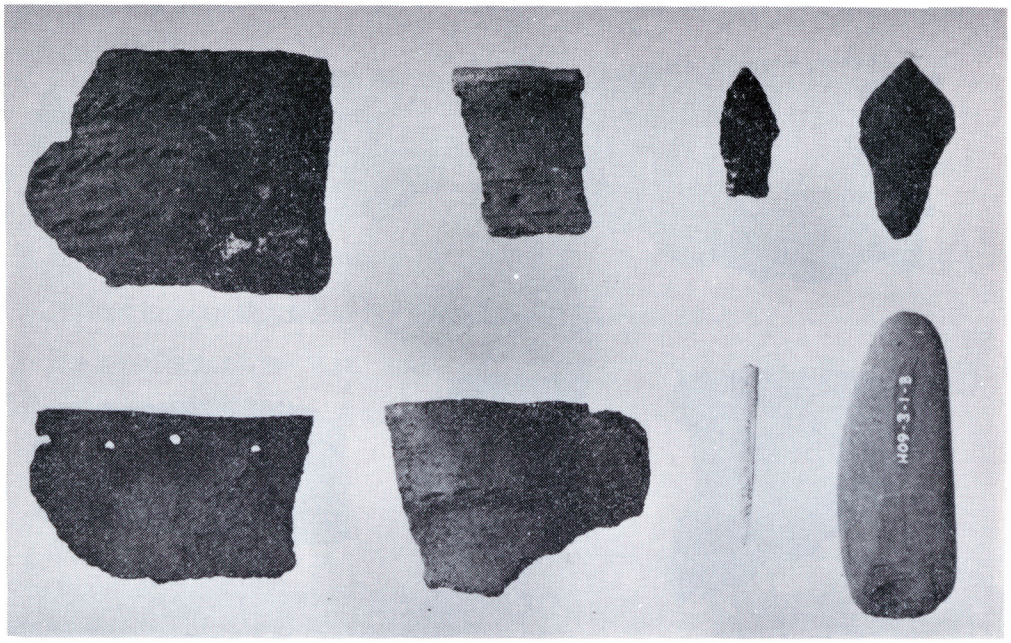
採集された遺物

①政泊（マサドマリ）遺跡（H－09－1）採集遺物

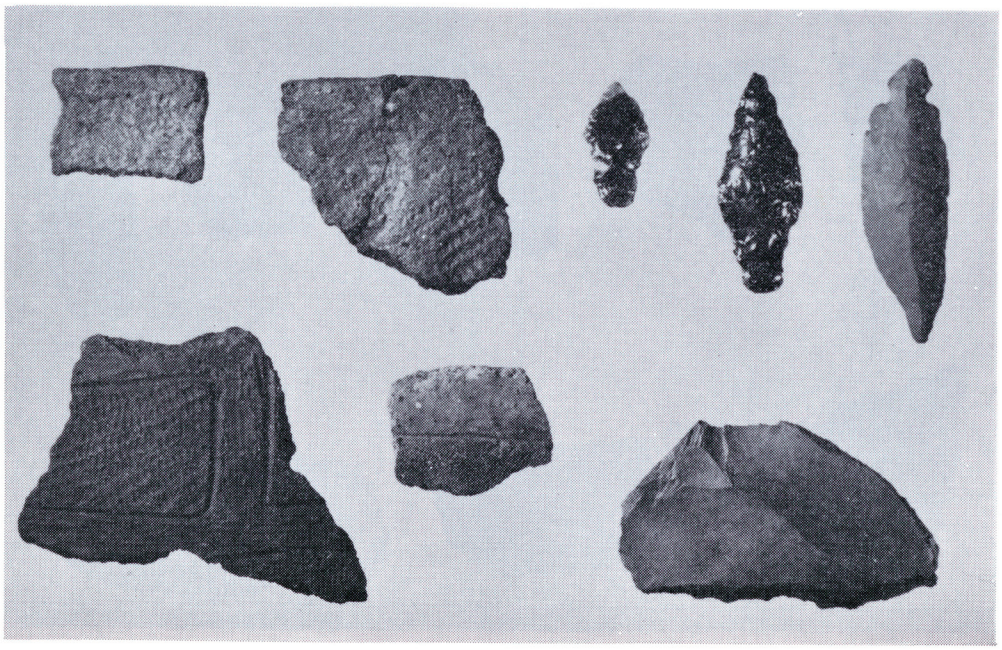


②亦稚（マタワッカ）遺跡（H－09－2）採集遺物

③種屯内貝塚(タネトンナイ)(H－09－3)採集遺物



④種富原野遺跡(タネトミゲンヤ)(H－09－5)採集遺物



遺物の説明

写真①　政泊遺跡採集遺物

左４個はオホーツク式土器の破片。左上のものは深鉢形土器の口縁の部分で，突刺してつけられた孔がある。表面には縄文があるので，オホーツク式土器の前身，ススヤ式土器と思われる。下２つは小形の壺形土器の上半部。右の３個は石器であるが，メノウで作られた石鏃は白いため，写真によく表われていない。右上は黒耀石製の石鏃，下は砂岩の砥石で，金属器（鉄）を砥いたものと思われる。

写真②　亦稚遺跡採集遺物

左の５個はオホーツク式土器片。この遺跡で採集したものには平行沈線のあるものが多い。いずれも甕形土器の部分で，上の３片が口縁部分，他は胴部である。石器３点のうち，左上は石器の作りかけの剥片，下は，この剥片をはがした残りの石で，石核と呼ばれるものである。

右上の１点は，日の出遺跡（Ｈ－０９－４）のもので，現在は中学校のグランドの盛土の下に埋ってしまったところから発見されたものという（星野家提供）。つまみ付きのナイフ又は削器で，つまみの部分に紐をかけて吊したものと考えられている。

写真③　種屯内貝塚採集遺物

左の４土器片は，政泊遺跡のもの（①）とたいへんよく似ている。オホーツク式土器のなかでは古く，樺太からも同じようなものが発見されている。４片とも甕又は鉢形土器の口縁部分である。右上の２個は打製の尖頭石器で，矢の先か，銛の先につけられたもの，左下は平らたい円礫を利用した小さな石斧である。その左の細く尖ったものは，今回発見された唯一の骨器で，鳥の骨を削って作っている。　折れているが孔をあけたり，ホークのように刺して使ったものと思われる。

真写④　種富原野遺跡採集遺物

左の４個は土器片であるが，縄文時代後期のもので，礼文島船泊からも同じものが発見されている。下の２片でよくわかるが，一度全面に縄を転がして縄文をつけてから，沈線で区画し，線の外信の縄文を消している。磨消縄文といわれ，縄文後期の模様の特徴である。左側の４個の石器は上段が左から黒耀石製の鏃，槍先，頁岩製のつまみ付ナイフ，下段が掻器（スクレイパー）で刃は下側についている。この遺跡からはこの他にメノー製の小さな錐が多類発見されている。

利尻町埋蔵文化財包蔵地一覧

遺跡番号	名称	所在地	立地	現状	備考
H－09－1	政泊遺跡	利尻町仙法志字政泊23の1・23の2・47・48番地	標高5～8m 扇状地の末端 範囲約400㎡（20m×20m）	道路用地	オホーツク文化 昭和24年新岡武彦氏により発見された
H－09－2	亦稚貝塚	利尻町沓形字緑町27番地 〃 本町79・83番地	標高5～10m 砂洲上 範囲約10.000㎡（120m×80m）	宗谷バスターミナル	オホーツク文化 明治32年に坪井正五郎氏が牙製偶像報告 昭和25年早稲田大学考古学研究会が発掘調査
H－09－3	種屯内貝塚	利尻町沓形字種富町71・74番地	標高4～5m 砂洲上 範囲 約1.000㎡（50m×20m）	畑及び草地	オホーツク文化 昭和25年早稲田大学考古学研究会が発掘調査
H－09－4	日の出遺跡	利尻町沓形字富野1・2・3・7番地	標高20m 扇状地の両岸 範囲 約700㎡（現存20m×10m）	学校グランド・校舎・畑	縄文（後期）文化 昭和45年菅正敏氏により紹介
H－09－5	種富原野遺跡	利尻町沓形字種富町111番地	標高5～7m 熔岩低台地 範囲 5.000㎡（100m×50m）	一部畑・原野	縄文（中期・後期）文化 昭和45年菅正敏により発見された

※ 所在地の住所は代表的なものである。

遺物採集地一覧

整理番号	採集地点	備考	整理番号	採集地点	備考
栄浜－1	栄浜燈台下	頁岩製剥片	沓形－2	泉町道々東方、電話交換所付近	石鏃
新湊－1	新湊港北、扇状地の末端	石核	神居－1	アキシオル沢南、海岸より約50m	土器片
新湊－2	新湊港東方、新湊郵便局前	黒耀石、頁岩の剥片	神居－2	アキシオル沢南、神居－1北方100m	石器・土器片
沓形－1	沓形岬燈台付近	つまみつきナイフ			

利尻町埋蔵文化財包蔵地一覧地図

1
32

利尻町立博物館
181030
13175